

三重大学人文学部外部評価総評

1. 外部評価員 有本信昭(岐阜大学地域科学部)

1)はじめに

私どもの大学・学部から過去に2名が外部評価の評価員と呼ばれているが、いずれも「前学部長」、「現学部長」と、いわゆる執行部(管理職)の立場か、それを経験した者であった。私は、「何ものなし」の平の教員で、その立場で外部評価をさせていただきたい。

2)当日の議論(説明と質疑)にかかわって

当日の説明は、「人文学部における社会連携」と『アラートシステム』の構築の2つであった。詳細な議事録が用意されると思うが、特に前者に対する私の質問を確認させていただく。

まず最初に「人文学部における社会連携」であるが、「社会連携」と「社会貢献」の違いなど、言葉の意味について質問し、あわせて私見をご披露した。

私見では、三つの要素があると考えます。

i) 「社会連携」ないしは「社会貢献」の対象地域

ii) 「社会連携」ないしは「社会貢献」の手段ないしは媒体(何を通して「連携」ないしは「貢献」しているのか。)

iii) 「社会連携」ないしは「社会貢献」の主体

当日「質疑」で説明された内容および私見は、

i) 対象地域……三重県、東海地域、国内および国外だが、中心的には三重県。

ii) 手段ないしは媒体……私の属する大学では、教員の業務を「教育、研究、医療、(大学・学部の)管理運営、社会貢献」の5つに区分している。

当日説明された「人文学部における社会連携」の8項目は、①公開ゼミナール、②出前講義および⑦人文学部フォーラム・「三重大学文科フォーラム」は、主として「教育」にかかわると考えられる。また⑥人文学部研究センターにおける研究は、主として「研究」にかかわると考えられる。また④自治体における審議会委員等は、直接的な「地域貢献」と考えられる。評価が難しいのは、③学部と自治体・博物館などとの協定、⑤大学院授業「三重の文化と社会」および⑧医療過疎地域における多角的評価による「アラートシステム」の構築であり、「教育」、「研究」および直接的な「地域貢献」の混合したものと考えられる。

iii) 「社会連携」ないしは「社会貢献」の主体……教員個人、教員集団、これらの活動にかかわる学生・院生、さらにはこれらの活動にかかわる行政や市民もがこの主体となっているのではないかと考える。この主体の多様性を踏まえた今後の連携・貢献が望まれると考える。

要するに、「社会連携」ないしは「社会貢献」は、多様な要素とその組み合わせによる多様な事柄であり、それらの全体が大学・学部の「社会連携」ないしは「社会貢献」であり、そのことを常に明確にして大学・学部内外での議論や情報の共有化、さらにはそのレベルアップを図ることが重要と考える。すなわち、大学内または学部内で議論するには、言葉の内容を厳密にすることが第一に求められると考える。教員個人で言えば、自分はそれといかに関わっているのか、自分はいかに社会と「連携・貢献している」のか、または今後とも連携・貢献するとしたら、「どのように連携・貢献できるか、しなければならないのか」

は、執行部からすれば「当たり前のこと」だとしても、「平の教員」一人ひとりでは、受け止め方に違いがあり、その内容も大きく異なると考える。

3) 総合的な評価(総評)

以下、3点について申し上げ、総合的な評価とさせていただきます。

第一に、過去4回の外部評価報告書を通読させていただき、また当日の「説明」をお聞きし、総合評価としては、はっきりと言って私の属する大学・学部の「地域貢献」よりも数段上の真摯な努力を積み重ねられており、多くの成果をあげていられていると感じざるを得ない。

それを代表する事柄として、2つの取り組みを取り上げる。一つは、様々な分野の教員の共働作業・共同研究を促進する見地から平成16年度に4つの学部(一部学部外も含む)研究センターを設けられ、研究費の配分や研究結果の報告を含めてシステムとして定着されていることである。またそのことを通じて学部内外の教員の共同研究を促進されていることである。各教員の属する学会や科学研究費の申請など外部の同じ研究領域の研究者との協働だけではなく、学部内を中心に学内外の研究者や行政や市民との共同・協働研究により、地域に密着した研究活動を進めるとともに、他の研究領域からの刺激を受けることにより、地域貢献はもとより、研究者としての成長を促進確保することにつながっていると推測される。二つは、大学院の地域密着型のPBL型の研究・授業の取り組み「三重の文化と社会」である。毎年、2人の教員が担当されるとのことであるが、対象地域の行政や市民との連絡・調整など、多大な負担を抱えてなさっていることは、比較的「地域貢献」に取り組む方である私には十分推測されることであり、またその成果を直接の現地報告会だけでなく地域交流誌『TRIO』に執筆するなど、大学院生にも多くの効果をもたらしていると思う。ただし、本当にこの運営の負担は大きく、それゆえに効果も高いものの、毎年着実に実施・継続されていることには頭が下がる思いであり、高く評価したい。

第二に、数年に一度の「外部評価」の評価結果を生かし、第5回目の「外部評価」では着実に「学部の教育や研究」を改善されていることを高く評価したい。具体的には、「大学からは長時間の説明で、評価者は10分程度しか発言時間がなかった」(第2回外部評価の総評)や「学部としてのアピールポイントがつかみ難い」(第3回外部評価の総評)についてである。今回の「外部評価」では、前者の評価会の運営や後者の学部の「アピールポイント」が明確化していると感じた。

第三に、最後に第一・第二の評価をひっくり返すようで申しわけないが、「三重大学人文学部は(執行部も、平の教員も)大変だ」というのが正直な感想である。教員の皆さんの状況をつまびらかに知る立場にはないが、私の属する学部のことを考えながら勝手に推測するに、(執行部の皆さんは言うまでもなく)特に若い教員の皆さんがこの現在の状況をどう考えておられるのか、こうした学部運営が持続可能なかどうか、気がかりである。願わくば、特に若い教員のみなさんがゆったりと仕事ができ、貴重な地域貢献のいない手でもある学生・院生や大学・学部外の市民とゆっくりコミュニケーションが取れるような環境を保証することが重要であると考え。そのためには、学部の構成員(経験を積んだ教員、若い教員、事務職員、院生・学生)の交流とコミュニケーションを良い一層発展させ、大学・学部の「基本理念や目標」の共有化を進めて、相互の学習と研鑽を温かい気持ちで進めることができる環境整備を特に執行部の皆さんに期待したい。

以上。